「仏教文法」としての『チャンドラ文法』

矢　崎　長　潤

1. はじめに

『チャンドラ文法』（Cāndravyākaraṇa, C）は，チャンドラゴーミン（Candragomin, 5 世紀頃）による Cāndrasūtra（CS）とダルマダーサ（Dharmadāsa, 5–6 世紀頃）[1] による注釈 Cāndravṛtti（CV）にて構成され，仏教徒がサンスクリット文法学を修学するために使用したことから，仏教文法と称される．本稿は C の特徴を解明するために，C が当時の仏教徒における言語使用の実態，すなわち仏教文献を考慮して構築されたのかを検討する．

2. 世親の語義解釈と文法学者との議論

当時の仏教徒に知られた文法事項として，世親（Vasubandhu, 4–5 世紀頃）の『倶舎論』（Abhidharmakośabhāṣya, AKBh）にある Kṛt 接辞の一種である Ktvā 接辞についての議論に注目したい．世親は，pratītyasamutpāda（「縁起」）の語義解釈を提示し，文法学者との間で議論を展開する[2]．彼は pratītyasamutpāda における pratītya とは，接頭辞 prati を伴う動詞語根 i の後で Ktvā 接辞が導入された語形であるとする（AKBh 138.1–3）が，文法学者はその Ktvā 接辞に関して，A 3.4.21: samānakartṛkayoḥ pūrvakāle「二つの行為に同一の行為主体がある時に，その中で先行する時間に属する行為を表示する動詞語根の後で，Ktvā 接辞が導入される」に注意を払わなければならないと指摘する．すなわち，この規則を適用するには，snātvā bhuṅkte（沐浴してから［彼は］食べる）のように，同一の行為主体にある二つの行為に時間的前後関係を想定しなければならない．pratītyasamutpāda に Ktvā 接辞を導入するならば，同一の行為主体に発生する二つの行為，すなわち pratītya が意味する「到達する行為」と samutpāda が意味する「生じる行為」とに時間的前後関係を想定する必要がある．しかし，生じるものが生起する以前に，原因に到達することはあり得ないし，また，到達する行為と生じる行為とが同時であることも適切

ではない．二つの行為が同時であるならば，この規則に従う限り，Ktvā 接辞は導入できないからである（AKBh 138.3–7）．この批判に対して，世親は Ktvā 接辞の用法には必ずしも時間的前後関係がなくても使用されるケースがあると反論する（AKBh 138.9–20）．この反論は，文法学の見地に適ったものであり，カーティヤーヤナ（Kātyāyana, 前3世紀頃），パタンジャリ（Patañjali, 前2世紀頃）による議論を援用したものである．

3. 反論の背景：カーティヤーヤナとパタンジャリの議論

カーティヤーヤナは，Vārttika（Vt）においてパーニニ（Pāṇini, 前5世紀頃）の Aṣṭādhyāyī（A）における冗長性などを指摘し，必要に応じて規則の修正，追加を提案した．パタンジャリは Mahābhāṣya（Mbh）において，それを再検討，吟味した．彼らは A 3.4.21 においても以下のように検討する．

> 【Vt 5：】vyādāya svapiti（［口を］開けて［彼は］眠る）という［実例に関して，］追加規定［がなされるべきである］．［口を開ける行為は］先行する時間に属さないから．【Mbh：】vyādāya svapiti という［実例に関して，］追加規定がなされるべきである．［問：］しかし，どうして［追加規定なしには］成立しないのか．［答：］［口を開ける行為は］先行する時間に属さないから．なぜならば，彼は先に眠り，後で［口を］開けるから．【Vt 6：】むしろ［追加規定がなされるべきでは］ない．眠る［行為］は後の時間に属するから．【Mbh：】むしろ［追加規定が］なされるべきではない．［問：］なぜか．［答：］眠る［行為］は後の時間に属するから．後の時間に属するものが，眠る行為である．彼は［口を］開けて，たしかに一瞬であっても眠る[3]．

カーティヤーヤナは，Vt 5 において時間的前後関係のない場合でも Ktvā 接辞が導入される言語表現があると主張する．すなわち，vyādāya svapiti という言語表現には，vyādāya が意味する「口を開ける行為」と，svapiti が意味する「眠る行為」とがあるが，これらには時間的前後関係はない．だから，この実例を補完するために，A 3.4.21 に何らかの追加規定をしなければならないという[4]．これに対して，カーティヤーヤナは Vt 6 において別の見解を紹介し，A 3.4.21 において追加規定をする必要はないとする．上記のように Ktvā 接辞の導入における時間的同時性に関する議論は，古くから A の伝統の中で議論されてきた．世親は自説を擁護するために，これを援用している．江島 1985 によれば「縁起」の語義解釈において，同様の議論はバーヴィヴェーカ（Bhāviveka, 490–570 頃）などにもみられ，後の仏教徒にとっても継続して議論されたものであった．

4.『チャンドラ文法』における Ktvā 接辞の議論

『倶舎論』さらに「縁起」という語の重要性を念頭に置ければ，仏教徒にとっても Ktvā 接辞の時間的同時性に関する議論は，無視できない文法事項に思える．C がパタンジャリの影響を強く受けているという側面からしても，この文法事項を扱っていても違和感はない．しかしながら，A 3.4.21 に相当する CS 1.3.131 に対する注釈 CV は，この文法項目を扱っていない．これが確認できるのは，ラトナマティ（Ratnamati, 10 世紀頃）の Cāndravyākaraṇapañjikā においてである．

> vyādāya svapiti という［実例］について．眠気によって引き起こされる［口を］開ける［行為］の後で，眠る［行為］があるので，この［実例］でも，［口を開ける行為は］先行する時間に属する．［二つの行為の間に］介在する時間は微々たるものなので，ある人達は［時間的な］差異を意識しない．あるいは，［二つの行為が］同時である場合にも，［口を］開ける［行為］が先行すると［話者によって］意図される．［話者は，実際には］存在しないものをも意図することがある．例えば，vindhyo vardhitakaḥ（ヴィンドヤ山飯）のように[5]．

5. おわりに

C は 5 世紀当時の『倶舎論』という仏教文献にみられる文法学的な議論，とくに「縁起」という重要な語において議論された文法事項を収録していない．チャンドラゴーミンらが『倶舎論』にある仏教徒の議論を承知していたと考えるとき，このことは，C における彼らの編纂の方針を想定させる．すなわち，彼らはこの文法を構築するにあたって仏教文献における議論を取り込むことを重要視していなかったのではないかと思われる．これは，C を「仏教文法」と呼ぶ場合には，注意を払わなければならないことを示唆している．

---

1)『チャンドラ文法』の著者と年代については，Vergiani 2011 参照．

2) 世親の「縁起」解釈については加藤（1989, 318–321），楠本（2007, 127–165）参照．世親の解釈について国際仏教学大学院大学教授斎藤明先生に重要な指摘をいただきました．記して謝意を表します．

3) Vt 5–6 on A 3.4.21（Mbh II.173.11–16）: vyādāya svapitīty upasaṃkhyānam apūrvakālatvāt. vyādāya svapitīty upasaṃkhyānaṃ kartavyam. kiṃ punaḥ kāraṇaṃ na sidhyati. apūrvakālatvāt. pūrvaṃ hy asau svapiti paścād vyādadāti. na vā svapnasyāvarakālatvāt. na vā kartavyam. kim kāraṇam. svapnasyāvarakālatvāt. avarakālaḥ svapnaḥ. avaśyam asau vyādāya muhūrtam api svapiti.

4) カーティヤーヤナは具体的にどのような追加規定を行うべきかについては明言していない．しかし，Kāśikāvṛtti（KV）の注釈者ジネーンドラブッディ（Jinendrabuddhi, 700 年頃）による解釈は，カーティヤーヤナの追加規定に関連させて考えることができる．すなわち，A: 3.4.20 parāvarayoge ca における ca を A 3.4.21 に〈継起〉させて，ca に anuk-

tasamuccaya の意味を読み込むことで，二つの行為に時間的な前後関係が認められる場合（pūrvakāla）のみならず，そうでない場合（apūrvakāla），つまり同時の場合でも，A 3.4.21 が適用できる（Nyāsa to KV on A 3.4.21（KV III.165.28–166.24）参照）.

5）Cāndravyākaraṇapañjikā to CV on CS 1.3.131: vyādāya svapitīti nidrayābhibhaviṣyato vyādānād anantaraṃ svāpa ity atrāpi pūrvakālatvam. vyavadhāyakakālasya saukṣmyāt kaiś cid bhedānupalakṣaṇam. sahabhāve 'pi vā vyādānasya pūrvatvaṃ vivakṣitam. asato 'pi vivakṣā vindhyo vardhitaka iti yathā. 写本情報については Dimitrov（2016，675）参照（校訂箇所は次のとおり．Göttingen MS Xc14/69, fol. 50a5; Calcutta MS G5645/2, fol. 27a5–7．異読は紙面の都合により省略した．梵文校訂にあたり，Dragomir Dimitrov 博士（マールブルク大学）にご助力いただきました．記して謝意を表します．

〈一次文献および略号〉

A: *Aṣṭādhyāyī* of Pāṇini. See Cardona（1997, Appendix III）.

AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Ed. Prahlad Pradhan. Tibetan Sanskrit Works Series Vol. 8. Patna: K.P. Jayaswal Research Institute, 1967.

CS: *Cāndrasūtra* of Candragomin. See CV.

CV: *Cāndravṛtti* of Dharmadāsa. *Candra-Vṛtti. Der Original-Kommentar Candragomin's zu seinem grammatischen Sūtra*. Ed. Bruno Liebich. Leipzig: F.A. Brockhaus, 1918.

KV: *Kāśikāvṛtti of Jayādiṭya-Vāmana*（*Along with Commentaries Padamañjarī of Haradatta Miśra and Vivaraṇapañcika-Nyāsa of Jinedrabuddhi*）. Ed. ŚrīNārayāṇa Miśra. 6 vols. Ratnabharati Series 5–10, Varanasi: Ratna Publications, 1985.

Mbh: *The Vyākaraṇa-Mahābhāṣya of Patañjali: Edited by F. Kielhorn. Third Edition. Revised and Furnished with Additional Readings*, *References*, *and Select Critical Notes by K.V. Abhyankar*. Ed. K.V. Abhyankar. 3 vols. Poona: BORI, 1962–1972.

Nyāsa: *Nyāsa* of Jinendrabuddhi. See KV.

Vt: *Vārttika* of Kātyāyana. See Mbh.

〈二次文献〉

Cardona, George. 1997. *Pāṇini: His Work and Its Traditions*. Second Edition. Delhi: Motilal Banarsidass.

Dimitrov, Dragomir. 2016. *The Legacy of the Jewel Mind: On the Sanskrit*, *Pali*, *and Sinhalese Works by Ratnamati*, *A Philological Chronicle*（*Phullalocanavaṃsa*）. Napoli: Dipartimento Asia Africa e Mediterraneo Università degli studi di Napoli "L'Orientale".

Vergiani, Vincenzo. 2011. "A Quotation from the *Mahābhāṣyadīpikā* of Bhaṭṛhari in the Pratyāhāra Section of the *Kāśikāvṛtti*". In *Studies in the Kāśikāvṛtti: The Section on Pratyāhāras*, *Critical Edition*, *Translation and Other Contributions*, eds. Pascale Haag and Vincenzo Vergiani, 161–189. London: Anthem Press.

加藤純章　1989『経量部の研究』春秋社.

楠本信道　2007『『倶舎論』における世親の縁起観』平楽寺書店.

江島恵教　1985「『中論』註釈書における「縁起」の語義解釈」平川彰博士古稀記念会編『仏教思想の諸問題』春秋社，139–157.

〈キーワード〉　Cāndravyākaraṇa，Aṣṭādhyāyī，チャンドラゴーミン，『倶舎論』，縁起

（名古屋大学大学院）